

同 体 大 悲

ゆったりと温泉につかりながらも、湯舟のなかで家族の心配をするのが母心ではないでしょうか。人生は悩みが変わるばかりで、心配の種は尽きることがありません。一年のうちでも、無事で、心配もなく、のんびりと暮らせる日はほんのわずかです。家族全員が無事に過ごせる日は貴いことです。「無事これ貴人なり」とはよくいったものです。

観音経では、「無量の苦 身に逼る」と、人間の生活苦を表現しています。そのために、観音さまは衆生の苦悩を深く受け止めてくださっているわけです。他人の苦しみを自分の痛みとして感じることを「どうたいだいひ同体大悲」といいます。母がわが子を心配するように、観音さまも常に衆生の煩悶に聞き耳を立てて悩んでおられます。

金龍寺の大観音を背後から眺めると、尊顔は前かがみになって、直立した上半身が曲がっているように見えます。これは信者の祈りに親しく寄り添って、それに応じておられる同体大悲の姿勢です。頭上に並ぶ十一面も前かがみになって、四方八方に眼をそそぎ、信者の苦しみをしっかりと受け止めておられます。その厳格な表情一面一面を、下からはつきり拝むことができます。

今年も、二十四時間の「ふだんねんじゆぎやうどう不断念誦行道」を行ないました。大観音の足元にて、坐っているだけで、あるいは歩き続けているだけで、なにかしらのありがたさに胸が熱くなります。観音さまの慈悲の眼が、私たちに温かく包んでおられる同体大悲を感じます。たった年一回の不断念誦行道ですが、観音さまとの一体をしっかりと感じるすることができます。

十一面観音さまのご真言は、「おん まか きやろにきや そわか」とお唱えします。「大きな悲しみを救う」という意味です。このご真言は、初めての人には舌がもつれて唱えにくいようです。しかし、三十分も続けていれば流暢に唱えられるようになります。

金龍寺の大観音の足元をめぐる続けることが「不断念誦行道」です。

信者の歩行に十一面観音の真言が融け込むことが「同体大悲」です。